

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 手島崇裕

本論文「平安時代の対外関係と仏教——入宋僧を中心に」は、平安時代の日中交流を担った渡海僧、とくに北宋に渡った入宋僧の活動の分析を通じて、日本中世仏教成立にいたる国際的契機を探ろうとしたものである。近年の日本中世仏教成立史研究はおおむね国際的契機、とりわけ教義面でのそれを重視する傾向にあるが、本論文は、主として政治外交上の契機に注目したところに大きな特徴をもつ。

本論文は、本論 8 章と序章・終章よりなるが、まず第 1 章では、入宋僧考察の前提として、遣唐使廃止後の対外交渉全般について整理される。当該期の対外交渉は朝廷により一元的に管理・統制されていたことが近年の研究によって明らかにされているが、本章ではその構造のもとで中国仏教にとりわけ強い関心を示した撰閲家の対外交渉活動に注目し、その活動を可能にした撰閲家と大宰府、宋商人間の重層的、相互依存的な人的ネットワークの存在が指摘される。

第 2 章では、前章で明らかにされた遣唐使廃止後の対外交渉の展開のなかで渡海僧に生じた性格変化の問題が論じられる。当該期の渡海僧は、政治外交関係から距離を置いたまま文物・文化の輸入だけを担う、いわゆる「文化交流使節」としての役割をはたし、一方ではその出入国が朝廷によって管理されていた点で、朝廷にとっては対外交渉権が掌中にあることを象徴する存在でもあったが、本章では、北宋が渡海僧を正式の外交使節として利用する姿勢を示しはじめたことにより、渡海僧がたんなる「文化交流使節」とどまるのが困難になっていったこと、その結果、朝廷は彼らの出国を認可しなくなり、渡海僧は密航を余儀なくされていったこと、そして奄然師弟の日宋往来が、そうした性格変化の大きな画期となったことが論じられる。

第 3 章では、10 世紀後半の奄然師弟の入宋に焦点を当てつつ、前章で言及された北宋の仏教および外交政策の内実が明らかにされる。従来、仏教は国境や地域を越えてゆく普遍宗教、東アジア世界の共通言語としての性質をもつことが自明視され、中国が構築しようとしていた礼的、儒教的国際秩序を相対化する面があったと考えられてきたが、本章では、当該期に周辺諸国からの入宋僧が朝貢使節同等の待遇をうけ、皇帝面見や賜紫衣・賜師号等々の厚遇をうけるようになったこと、すなわち東アジア世界において、仏教が宋皇帝の主権しようとする国際秩序と一体化し、それをささえる機能を強く発揮するようになったことが指摘される。中国仏教では、唐代後半から宋代にいたって皇帝権威のもとへの僧団の従属編成が完成することが観察されるが、中国国内のみならず、周辺諸国からの入宋僧もまたそうした政治的価値体系のなかに包括されつつあったことが本章において明らかにされる。一方、中国との政治外交関係を望まない遣唐使廃止後の日本にとって、皇帝権威に従属した中国仏教は、もはや追走すべき目標とはみなされなくなり、それを契機として日本独自の内実をもつ中世仏教の展開がはじまるとされる。

第4章では、中国僧ばかりでなく、周辺諸国からの入宋僧も出家→得度→受戒→紫衣→師号という宋の僧侶昇進システムに組み込まれていたことが明らかにされたうえで、齋然師弟について入宋した寂照が、弟子僧を一時帰国させたさいに師弟の度縁（得度証明書）を北宋に送らせた事例が分析され、その度縁が朝廷総意のもとで意識的に華美に仕上げられたこと、その背景として朝廷や藤原道長が自国仏教への強い自負と宋への対抗意識を燃やしていたことが指摘される。

第5章では、寂照の飛鉢説話の場面設定が11世紀末～12世紀初頭成立の『続本朝往生伝』から12世紀前半成立の『今昔物語集』へ大きく変わる事実に焦点が当てられ、そこに摂関期から院政期にかけての対外意識の変化が読みとれることが指摘される。

第6章では、11世紀後半、寂照について入宋した成尋が著した旅行記『参天台五臺山記』を素材にして、宋皇帝との直接的なつながりと厚遇を得た入宋僧に、さまざまな思惑から接近する宋の人びとの動向が探られ、当該期中国仏教が普遍宗教、東アジア世界の共通言語としての性質を急速に失いつつあった状況が浮き彫りにされる。

第7章では、成尋と同様、密航を余儀なくされた成尋後の入宋僧の動向が追跡され、彼らの密航を助けたのが、大和国多武峰から大宰府管内まで延びる国内寺社・僧侶のネットワークであったことが明らかにされる。

第8章では、日本の対外的諸動向と密接なかわりをもつ世界観・対外認識について考察される。天竺（インド）・震旦（中国）・日本という、いわゆる三国世界観は、中世日本国家の支配イデオロギーとして機能する顕密仏教確立過程のなかに生成・展開した世界観であったが、それは入宋僧たちが宋で経験した実体験と無関係ではなかったことが指摘される。すなわち、南宋へ渡海した栄西や慶政らは南宋を経由して天竺にいたることの不可能性を体感し、それにもとづいてさまざまな述作をなしたが、それらが大きな原因となって、天竺は観念上の虚像となり、日本中世仏教の価値の源泉として不動の地位にすえられる。一方、震旦観についても、文殊菩薩現住の地、五臺山が南宋期に金の版図に入り、天竺と同様、その到達不可能性が増すなか、金峰山など、日本国内の霊地への仏教の始原性の吸収（代替地化）が進行する。こうして国際情勢の変動や緊張を背景に、インド・五臺山という仏教の始原にかかわる聖地を観念のうちに完全に取りこんでしまうことで、顕密仏教の世界観が以後国際環境の動静とはかかわりなく保ちうるものとして確立・定着したと論じられる。

審査では、2、3の用語上の問題点や、外交を論じたにしては契丹（遼）への言及が少ないなどの指摘が出されたものの、日英中韓の4言語にわたる幅広い先行研究や史料を博搜した力作であり、とりわけ日本中世仏教成立にいたる国際的契機として、北宋の政治外交上の外圧が存在したことを明快に論証しえたこと、および先行研究において明確に関連づけられていなかった摂関期仏教と中世仏教の関係について合理的な説明を与えたことの学術的意義はきわめて大きいという点で審査委員の評価は一致した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。